触発の技法と可能性

広瀬 浩二郎

１．なぜ失明は不幸なのか

①夏目漱石『明暗』に示される「則天去私」の境地

「自己本位」を脱却することにより、近代的な二項対立を乗り越えるヒントが得られる。

②医療と福祉、リハビリとの連携をめざすある眼科医との対話

「見えない」人を「見える」ようにする医師と、「見える」人を「見えない」ようにする触常者の発想は似ている。

③視覚障害者コミュニティが二極化する今日的状況

「どっぷり」型と「あっさり」型、遠視・近視・弱視など、さまざまな「見え方」のグラデーションは地続きである。

２．体験的「失明得暗」論

①「触角」を取り戻す契機となる点字との出合い

失明後、「できない」ことが増える中、初めて新たに「できる」ようになることを発見する。

②二項対立を助長する現在の特別支援教育に対する違和感

「School of the Blind」の伝統を堅持する本来の盲学校は、「聴覚・触覚支援学校」である。

③点字受験を通じて実感した「完全参加と平等」

失明の克服、得暗の忘却が、「自立」として称賛され、視覚障害者の社会参加を促進する。

３．「得暗」の歴史的意義を探る

①琵琶法師・瞽女・イタコの生業

「見えない世界をみる」技法の原点は、「触角」を錬磨する単独歩行、旅の苦労と工夫にある。

②21世紀版「耳なし芳一」を書く理由

「視覚を使わない」得暗者が、「視覚を使えない」失明者として蔑視される過程を描く物語を再評価する。

③コロナ禍が惹起した「拒触症」の蔓延

「困っている弱者」イメージが強調されるマスコミの障害者報道は、和尚が芳一の「触角」を封印した経文につながる呪力を持つ。……資料Ⅰ

４．点字考案200周年を迎える心構え

①「盲人」を「視覚障害者」に変換したルイ・ブライユへの異議申し立て

1824年の点字発明により、文字を使わない「失明得暗者」は、光（明）を得て、闇（暗）を失う。

②小学校の国語教科書で「点字」が取り上げられる意味

現状の「人に優しい」バリアフリー教育では、「してあげる／してもらう」「頑張る／かわいそう」という単純な障害者理解を超克できない。

③触文化への気づき、触文化からの築きを促す「点字力」

万人が点字の手触りを味わう経験を介して、「失明＝失暗」とされてきた近代的な価値観・人間観、視覚優位の常識を問い直す。

５．人類の進歩と調和の先にあるもの

①「世界を見せる」万博から、「世界観に触れる」万博へ

2025大阪・関西万博のテーマ「Designing Future Society for Our Lives」に対して、疑問を感じると同時に期待を抱く。

②「インクルーシブ」「アクセシブル」とは異なる「ユニバーサル」の定義

個別の障害者・高齢者・外国人対応を積み上げるだけでは、「ユニバーサル＝普遍的な」博物館にはならない。

③「当事者発＝from」の理念の重要性と危険性

「接触と触発の連鎖」をユニバーサル化するためには、森羅万象の「触角」を育てる神道の「共活」思想に学ぶ必要がある。……資料Ⅱ

〈参考文献〉

広瀬浩二郎『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！

－世界の感触を取り戻すために』（小さ子社、2020年）

〈参考動画〉

　・自然との濃厚接触動画「バリアアリー森の冒険」

https://youtu.be/8sY9\_UU3aH0

　・オンライン・ワークショップ「世界の感触を取り戻す」（完全版）

https://youtu.be/KW5M8ucd14M

　・オンライン・ワークショップ上級編「トーテムポールをさわる」

https://youtu.be/OOazfqbMV\_s

　・触文化のプロモーション動画「仏像触察映像」

https://youtu.be/rifkU9obBY8

琵琶なし芳一がやってくる！

芳一は琵琶法師としての修行に励む

なぜ自分は目が見えないのか

それは、目に見えないものと自由に話をするためではないのか

一次元の芳一は、自問自答を繰り返し、優れた芸能者となる

芳一は聞き手を意識して腕を磨く

彼の琵琶を聞くために、たくさんの人が集まる

木々のざわめき、川のせせらぎ、海・山の風景

二次元の芳一は、聞き手を想像の世界に引きこむ力を身につける

芳一は琵琶法師として成長する

目では見えないもの、耳では聞こえないものとの交流

芳一の声、琵琶の音は天につながり、地を震わせる

三次元の芳一は、大宇宙に響く声と音を手に入れる

芳一は過去、未来へと時間旅行を始める

体が楽器になることを知った芳一は、琵琶を捨てる

身軽になった彼は、僕たちの体をやさしくノックする

四次元の芳一は、今を生きるみんなの心の中にいる